

スポーツ医学に対する疫学的アプローチの強化

2年間で「基盤整備」から「成果創出・実装」へ進展

クリニック診療録、国際大会サーベイランス、全国規模の脳振盪データを結び、研究と現場実装の両輪で前進した

メディカルプロブレムの標準化と特徴抽出

- JISSクリニック開所以来の診療録を解析基盤へ変換開始
- 内科・整形外科に加え、婦人科・歯科まで対象を拡大
- 2026年度はデータ化を継続し、領域横断的な解析へ展開

国際大会メディカルサーベイランスの構築

- ミラノ・コルティナ冬季五輪・パラで本番運用を実施
- 外傷・障害、疾病、メンタルヘルス障害を一元収集
- 選手団本部報告に活用し、継続運用の基盤を強化

脳振盪サーベイランスと成果の可視化

- 全国データを用いた関連論文2編が採択
- プレスリリースを通じ、研究成果を社会へ発信
- 競技特性と受傷場面に応じた予防の焦点を提示

2025年度に見えた成果

研究面: 全国規模データを用いた脳振盪研究を論文化し、競技別・場面別の具体的な知見を提示

実装面: 国際大会でサーベイランスを本番運用し、収集データを選手団本部報告へ活用

次年度: 2025年度に構築した基盤を活用し、診療録解析と予防戦略提案を加速度的に推進

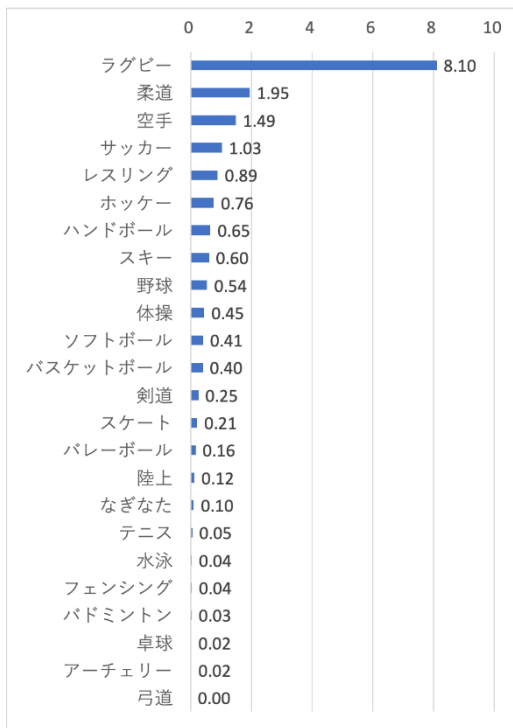
脳振盪研究で得られた主な知見

全国データから分かったこと

部活動中の脳振盪は「誰に・どこで・どの場面で起こりやすいか」を全国規模で可視化できた

- 中高部活動のSRC 12,158件を解析。男子が84%、中学・高校とも2年生が最多
- 競技別ではラグビー 8.10/1,000人が最も高く、柔道 1.95、空手 1.49、サッカー 1.03 が続いた
- コンタクトスポーツでは試合、非コンタクトスポーツでは練習で多い傾向がみられた

24競技における
部員1,000人あたりSRC発生割合



サッカー研究の具体的知見

「接触そのもの」だけでなく、その後の転倒・地面衝突が重要な危険局面だった

- 受傷メカニズムで最も多かったのは「他選手との接触後の地面との接触」40.2%
- 次いで「他選手に当てられた」29.3%、「用具との接触（主にボール）」22.0%
- 学年が上がるほど、試合中の接触関連のケースが増える傾向を示した

サッカーにおける脳振盪受傷メカニズム

